
まどろみの国の物語

一理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじろみの国の物語

【著者名】

一理

N5065BA

【あらすじ】

まじろみの国　夢と現実の狭間に存在する不思議な国で、それぞれに深かつたり浅かつたりの物語が存在する。
司は複雑怪奇で意味不明の物語を見ていきながらふと淡い恋心に気がつくが、関係ないやつに邪魔されていく。

1、プロローグ

チャイムの音は甲高い。

扉を開け閉めする動作音はつるさい。

騒がしい生徒の声は先生の一喝で静まり返る。一瞬だけ。始まつた授業は退屈な数学の授業で、黒板に書きだされていく数字は何の意味をもつのか私にはわからない。教科書を立ててこつそりお菓子を食つやつも、机の下を不自然に覗き込みながら携帯をつつくやつも、興味ない。

あぐびを一つもらすと、紙屑が飛んできた。

「・・・・・」

「ミミ」に捨ててクンなし

先頭の片隅の席だったのちよづき斜め前にある「ミミ箱めがけ投げ捨てる。

「ねむ」

もう一回あぐびをする。

「ひん」とまた「ミミ屑が

「・・・・・」

だれやねん。

振り返ると森馬一数だった。ちなみに最初なんていつ名前か読めなかつたが、もつうまひとかずつていじらしく。

「ちつ」

舌打ちして睨むと『頼む』のポーズでこちらに何かを求めていた。

「えーと、今日はこの一列前に出て書け

ああ、今日あたる日だったのか、さまあ

「頼むよ、あとでなんかおごるからさ

「コンビニでH口本」

「はー?」

「嘘だよ」

「先生が早くしりつと急かす。

「頼むよ」

「仕方ないな」

黒板に書かれた問題を見る。
む、さっぱりわからん。

「答えは？」

「先生森馬が答えを聞いてきます」

「森馬あ」

「おまつ裏切り者！…」

どうでもいいけど、自分で解け。

休み時間、お弁当の時間。一人机の上に弁当を広げると横からすごい勢いで机をぶつけられた。睨むように見れば一年の時のみならず中高が同じといつ同じクラスの腐れ縁。伏見馨だった。

「何？」

「いやん夢野ちゃん怖い顔〜、一緒に食べよん」

馨は男だが女のような顔のつくりなので本人もたまに女のようふるまうことがある、友達も男より女のほうが多いし。

「苗字で呼ぶな

「かわいいのに、夢ちゃん」

「…」

「冗談怒らないで司」

男のくせに肩まである髪の毛をリボンでくくつて束ねているところをみると、先生の髪の毛切れという注意をまた無視するらしく。つかリボンつて。

弁当を食べ終え机に伏す。

「寝るの？ 眠り姫のよつによく眠るね。王子様のキスはいかが？」

「しばくぞ」

「馨ちゃん、司へ相変わらず仲いいね」

「優衣もか、私の眠りを覚ますものは何人たりとも許さぬ

「いつからファラオになつたの？」

優衣はどこからか椅子を引つ張つてきて『同』の前に座つた。

寝たいんだけど。

「ね、そんなに寝てなんなら『まどろみの国』はみたことある?」「まどろみ?」

「そう。よくわかんないんだけど、夢と現実の間にその国があるてそこに行くと願いがかなうんだってさ」

「へえ。お休み」

「聞けよ」

「つるわーな。

「同! お前よくもわつかない数学の時間」

「それ焼きそばパン? 一口くれ」

「伏見の一口は一口じやねーからいやだ」

「じゃあ私に頂戴」

つるわい頭上も無視して、眠る。
体が浮遊する感覚。

暗闇のはずの視界の隅から白い丸い何かがぴょこぴょこはねてやつてきた。それはテフロルト化された羊でかわいらしく一足で立っていた。

サツと看板を見せた。

「・・・・」

下?

下を見た瞬間私は、落ちた。

2、お茶のみのなか

お茶をすすつていて遠くから砂埃がやつてきているのが見えた。木の上で子どもはお茶をすすつている男がまたぶつ飛ぶものだと思つていたが、白い何かが高速で移動しきつたころには男はすでに回避し新しく急須にお湯を入れようとしていた。

「あ」

ぐしょ、男は上から降つてきた何かによつてつぶされた。珍しいこともあるもんだとおもつていたが、それでもなかつたようだ。

「おい、これなんだ」

「これじゃなくて、こいつのがいいんだけど」

司は起き上がつた。

学校で寝ていたら、なぜか外に出ていた。

周りは真つ白でただ広く、大きな木が一本だけあつた。夢か、夢なのか。そうなのか。

「自分が踏んでいるものを見ろ」

王様コスプレしたKidがそういうので、下を見れば誰か踏んでいることに気が付いた。のんびりのくと男が立ち上がつた。

「うわ」

思わず声がでた。

包帯ぐるぐるで肌が一切見えない。マイラ男だつた。

「なんで着てる服学ランなの」

「おや、突つ込むのはそこですか」

しかも雰囲気が今の学ランではなく明治とかに來ていた服の学ランだ。

「いや、そこは触れちゃいけない何かかなつて」

「豪胆ですねえ、結構結構。気にしませんが私がなぜ包帯まみれ

かといいますと

すつこーん。

田の前で話していたはずの男が消えた。

「・・・・・」

子供と一緒に傍観する。

ひゅうっと弧を描くとぐしゃっと着地した。

「生きてる?」

「いつものことだ。気にしなくていいよ」

子どもはそうこうて大きすぎるマントを引きずりて椅子に座った。
「でかせ、レーベン。夢か、こんなリアルすぎる夢どう対処したら

らいいのか

「そう、ここは夢と現実のせざまに存在するまどろみの国」

「うわ、血まみれですけど」

なんでこの人が包帯まみれなのかわかつた気がする。

「まどろみの国?」

夢がかなうとかどういえば優衣が言つてたな。ああ、なるほど
「優衣が変なこと言つから暗示的なものにかかる夢に深く出て

きたんだ」

「おい、包帯。なんか夢扱いだぞ」

「夢じゃないんですけどね、現実でもないのですが

「・・・・・」

包帯男は紳士的な動作で司の手をつかむと、軽く握った。

とたん、周りの真っ白な空間からカラフルな色が通り過ぎていき、
白と黒と灰色の光のたまが集まってきた。それは広がり森になつた。
彼は司の手をつかんだまま歩き出す。

「夢を見ていればあなたはまどろみの国の住民。でも起きている
あなたは大事なお客様だ」
なんでだろう、優しい声でそう言われたから、ドキッと心臓がは
ねた。

「あのせ、ビリこつてんの」

「他の国の紹介をば」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5065ba/>

まどろみの国の物語

2012年1月14日21時56分発行